

心の輪を広げる体験作文 中学生部門 ◆佳作

「寄り添い」

神奈川県立相模原中等教育学校 二年 佐藤 遙人

わたろう

はると

みなさんの周りに障害を持つ人はいますか。障害者と言っても視覚障害だったり、聴覚障害だったり、たくさん障害があります。その中でも僕の友達が発達障害者でした。そもそも発達障害とは、生まれつき脳の機能の発達の偏りによる障害です。

僕の友達が発達障害の中でもコミュニケーションを取るのが苦手です。そのためクラスの輪の中からはくはずれていました。それを見た僕は、

「コミュニケーションを取ることが苦手な子には、コミュニケーションを取ることが得意な人が話しかけるべきだ。」

と考えました。仲良くなるためにまず、その子の好きな事を知ることになりました。たとえばコミュニケーションを取る事が苦手だとしても好きな事を話すと会話をすることが楽しくなり、僕と話してくれるようになりました。

僕がこの友達と仲良くなる時に感じた事は2つあります。

1つ目は、障害を障害として捉えないことです。どういうことかと言うと、コミュニケーションを取ることが苦手な障害、目が見えない障害と捉えるのではないのです。コミュニケーションを取ることが苦手な特

徴、目が見えないという特徴、と捉えるべきなのです。残念ながら今の日本人は障害者は変わっているだったり、会話ができないだったり、そのような偏見がある人もいると思います。その偏見があるから心の壁がうまれると僕は思います。だから障害を特徴と捉えることで障害者への偏見が無くなり、心の輪を広げることができると感じました。

2つ目はなおる障害は無理になおさないということです。もし障害がなおるのなら無理でもなおしたほうがいいと思う人もいます。たしかに障害がなおるのならなおるのがいいとは思いますが、無理になおす必要はないと思います。僕の友達は今たくさん人と話すようになり、ほとんどコミュニケーション障害はなおりました。しかしそれは、僕が無理になおしたのではなく、1〜2年にかけて段々たくさんの人と一緒に話すようにしたのです。そうすることで話すことに慣れてもらうのが大事だと感じました。

僕がこの作文に書いたことが全てではありません。ほかの原因で悲しい思いをしたり、苦しい思いをしている方もいます。原因がなににせよ、一番大切なことは「寄り添う」ことが障害者に対する偏見が無くなり、色々な特徴を持つ人がすごしやすい世界が出来ると思います。そのためにも我々学生は、たくさんの人に寄り添い、心の輪を広げべきだと思います。